

日本外史關聯書籍の一端

土屋 博
つちや ひろし

頼山陽の「日本外史」は、文語を學ぶに際し、恰好の教材の一と覺ゆ。この一年間に小生の購入したる日本外史關聯書籍を擧ぐれば、左の如し。

一「外史字引」齋藤實穎編纂

(東京書肆中外堂發兌、明治九年刊、百二十丁)

古書價格五百圓也。兒童教育の始めは和漢の文字を識り國史に通ずるにあるとし日本外史に登場する漢字を畫數順に並べ、讀み方、意味、熟語等を示す勞作なり。この一冊を徹底的に頭に叩き込まば、文語學習の又と無き基礎とこそなるらめ。

畫數多き漢字の例を擧ぐれば、以下の如し。

麤(そ) あらし、おろそか、おほひなり

麤(さん) かまど、かしぐ

二「日本外史質問録」松山喜輔編輯

(明治九年刊、和綴)

古書價格二百圓也。たとへば、「白少將樂翁書」のうち「樂翁」につきては、「姓源名定信稱松平越中守居陸奥白川郡白川食十一万石」と。

三「外史譯語 上卷」大森惟中・莊原和同纂

(東京書林、明治十年四月再刻)

古書價格八百圓也。日本外史を讀む爲の漢字の參考書。上卷は十畫までの漢字を収録す。序に曰く、「今日我邦兒童教養の始めは和漢の字を識り國史に通ずるに在り。山陽先生の日本外史獨り煩簡當を得たりと爲す」と。十畫の例より。豕、ちよう。豕子はあとつぎ。滾、こん。滾龍はこんりよう、天子の御衣。畚、ほん。もつこ(土を盛り運搬する具)。、かう。虎の様に強い。荐、しきりに。殿、さかん。悚、しよう。おそれる。倅、こひねがふ。、とる。、ゆるむ。蓋し現代人にとりてかかる字を識る機會乏し。

四「日本外史字類講義」(全三冊)

(明治堂、明治三十年刊)

古書價格五百圓也。和綴。例言より、「此書は邊陲師に乏き子弟の日本外史を修學せんとする者の為に編輯したるを以て將來有為の少年に於ては座右に缺くべからざるものなり」と。

五「改正刪補 日本外史字類大全」河村與一郎纂輯

(積善館藏、明治四十四年活版廿版)

古書價格四百圓也。初版は明治十年。たとへば、「樂翁」につきては、「天明寛政の間老中上首となり賢明の譽あり、樂翁は退老の後の名」とあり。

六「日本外史字解」山中肅編

(大阪彰文館、明治四十五年刊、九六頁)

古書價格千五百圓也。凡例に曰く、「外史註釋の如き、初學の爲に資する者、汗牛充棟も音ならずと雖も、繁に失せずんば簡、魯魚焉馬の誤なくんば杜撰、孟浪の譏を免れず。」と。外史氏については「正史は史官の作る所、外史は一家の私史を言ふ。史氏は史家の意味」と。本書は類書に比して薄き點に特色あり。

七「賴山陽集」大日本思想全集刊行會

(先進社、昭和六年刊、五三三頁)

古書價格四百圓也。函入。日本外史論贊、新策、山陽文集、山陽書翰集、日本政記、日本樂府の現代語譯文を収録し、殊の外重寶す。賴山陽集は四七八頁迄にて、附録として、山縣大貳・竹内式部集も收む。

八「日本外史鈔 全」簡野道明校訂、國語漢文研究會編

(明治書院、大正元年訂正版大正十五年度用、臨時定價金五拾八錢、一四四頁)

古書價格二百圓也。本には「豫科乙組南澤たつ子」の署名あり。活字大きければバスや電車の中にても讀み易し。

九「日本外史鈔本」東京高等師範學校教授兒島獻吉郎編

(光風館、大正五年訂正再版、大正十三年臨時定價金四拾錢、一〇二頁)

古書價格二百圓也。初版は大正四年。平氏については、平氏傳統、忠盛興家、重盛諫言、維盛大敗、平氏滅亡の五篇、源氏については、源氏傳統、賴朝破平氏、賴朝伐義仲、一谷之戰、屋島之戰の五篇を収録す。

十「詳解 日本外史字典 附諸家系譜」奥村恒次郎著

(文友堂、昭和二年八版、定價金五拾錢、二二二頁)

古書價格三百圓也。凡例に曰く、「日本外史は賴氏が畢生の大著述にして番に日本歴史として趣味ある好讀物たるのみならず、その記事の清明にして勁邁けいしやうなる、その史論の警拔にして痛快なる、之れを讀む者の精神に多大の感化を與ふべく、これを一種の國民教科書としても亦大に價值あるものたるを信ずる也」と。

十一「註解 日本外史」五冊

(國民思想善導普及會、昭和八年刊、非賣品)

古書價格五百圓也。和綴。卷十二より卷二十二まで日本外史全體の後半部分に相當す。奇蹟的に古書の保存状態良好し。

十二「註解 日本外史」全十冊

(萬朝報社、昭和十年刊、定價十冊金五圓)

古書價格三千圓也。帙入。和綴。綠色。十一の存在を知り慌てて別途購入に走りたり。出版社及び装丁の色は異なれど、中身は同一なり。全卷揃ひたる氣分は格別なり。

十三「受験學習 十八史略・日本外史・近古史談 解釋」兒玉尊臣著

(駿々堂、昭和十一年刊、定價金壹圓、四八〇頁)

古書價格四千圓也。緒言より、「解釋の文章は最も平易簡明を旨とし何人にも分り易く且つ讀み易からしめん事に意を用ひたから、むつかしい本文と對照して必ずや一讀釋然たるものがある」と信ずる」と。頁の配分は、十八史略百三十六頁、日本外史二百三十四頁、近古史談百十頁なり。

十四「日本外史楠氏篇」賴山陽著

(斯文會、昭和十二年十二版、六五頁)

古書價格二百圓也。初版は昭和七年。所有者は「二女七 深井雪枝」。日本外史卷之五新田氏前記の箇所のみを収録す。本と云ふよりはノートの如き形状、材質なり。

十五「日本外史新釋」島田鈞一著

(有精堂、昭和十四年七版、定價金貳圓拾錢、六二七頁)

古書價格二千圓也。初版は昭和十二年。三度目の購入なり。(昭和十五年版、昭和三十五年版に次ぐ)。著者島田欽一は第一高等學校教授なり。

十六「賴山陽と日本精神」鹽谷溫著

(文部省教學局、昭和十八年六版、定價二拾錢、九〇頁)

古書價格二百圓也。日本精神叢書」シリーズの第十五卷、初版は昭和十五年、なり。二度目の購入。著者は東京帝國大學教授、曰く、「山陽は所謂才と學と識との三長を具へた良史である。學問もあり、才能もあり、識見に於て殊に卓越してゐる。日本外史は部門の歴史にして、司馬遷の史記の世家の體に倣ひ、源平二氏より徳川氏に至る、武家七百年間の諸家の始末を載せ、紀傳と編年との兩體を兼ねて、盛衰治亂の跡を略敘し、忠姦正邪の別を明かにして、隱約の中に春秋の筆法を學び、以て尊王賤霸の精神を貫徹せんとしたものである」と。

(令和元年六月二十四日受附)